夏至

高橋昌男

新潮社

夏至

高橋昌男

新潮社

夏至（げし）
一九九一年五月一〇日 印刷
一九九一年五月一五日 発行
著者 高橋昌男（たかはしまさお）
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務（〇三）三二六六-五一一一
編集（〇三）三二六六-五四一一
振替東京四-八〇八番
印刷所 株式会社三秀舎
製本所 大口製本印刷株式会社
©Masao Takahashi 1991, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります
ISBN4-10-325602-8 C0093

目

次

第一章　梅香館　7
第二章　雨ふる街　45
第三章　葬送の冬　99
第四章　潜　入　140
第五章　片目の王　179

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

第六章　恋する騎手　219
第七章　八月の光　256
第八章　テニアンの幽鬼　303
第九章　暮れない海辺　330
あとがきに代えて　378

装画・秋岡美帆

夏至

第一章　梅香館

その年の三月末の日曜日、耳掩いを上にはねた黒い防寒帽を目深にかぶり、襟の大きく開いたカーキいろの古外套を着込んだ木倉徳松なる若者が、壺ヶ沢から鷹宮を抜けて黒葉という集落へ向かう雪道を、はやる気持の手綱を引きしめ、ゆっくりした足どりで歩いていた。若者といっても二十五、六、頤はかたくしまり、見えるほうの右の目はついこの間までの職業的習性からか一種冷酷な色をたたえている。それにひきかえ、左の眼窩に嵌め込まれたガラス玉は、あるがままのものを映す、しかし何も考えない子供の目だ。北海道の音幌（ねほろ）の町で馴染んだ娼婦は、「死んでも腐らないからいいね」といってからかった。

踏みしめるゴム長の底で、ゆるんだ雪が解ける。ゲートルの上部を覗かせたゴム長は、実家の木倉旅館からの借りものである。五日前、かれは蓼科山麓櫛折（くしおれ）温泉のその旅館に、厳寒の北海道から帰り着いたばかりだった。契約仕事でかの地には一年とちょっといた勘定になる。

気は急くが、いそぐ必要はまったくなかった。

八ヶ岳の白銀色の稜線をまぶしく染めて昇った陽は、だいぶ横へ動いたもののまだ南アルプス

連峰の上にあって、雪の野づらに暖かい日差をめぐんでいた。腕時計を覗くと正午にちかい。佐喜枝と再会を喜び合う時間はたっぷりあった。

邪魔なのはかの女のおふくろだ。それともうひとり、去年の十一月に黒葉で生れたというガキも煩わしい。佐喜枝が年の暮にたった一度だけよこした便りには、かねて良人にいわれていた通り千秋と名付けたと書かれてあった。それを読んだとき、徳松は鼻の先で笑ったものだ。川添耿一の倅、千秋というわけか。〈火〉でつなげるあたり、いかにも大学出のインテリらしい厭味なやり方だ。……かれは肩からずり落ちそうなズックの鞄をゆすり上げた。鞄のなかには兄嫁が用意してくれたにぎり飯がふたつと、兄の要造からせしめた貴重な軍用品の水飴がひと壜はいっている。

要造は、折にふれ米、味噌の面倒は見てきたのだから手みやげなど要らないと言い張るのだ。「それに――」とかれは付け加えた。「あの女、おれは好かんな。たしかに器量好しで愛想はいいが、腹の底ではおれたち土地の人間を馬鹿にしているんだ。もっとも疎開もんは大抵そうだが」

兄の言葉を聞きながら、おれも徹底的に嫌われたひとりだといいかけて、徳松は口をつぐんだ。うっかり相槌をうって、佐喜枝を共通の敵に回すようなことがあってはならなかった。

かれは檻に閉じ込めたも同然の佐喜枝にたいして新たな野心を燃やしていた。今度は力ずくでなく、巧く手懐けて、むこうから身を投げてくるように仕向ける必要がある。そのためには、水飴以上の手みやげがほしかった。ところが昨日、それを手に入れたのだ。僥倖としかいいようがなかった。徳松が土木技師というふれこみで勤めることになった近くの鉄山の事務所で、経理の手伝いを捜している、できれば算盤に堪能な女がいいという耳寄りな話を聞き込んだのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

一ヵ月ほど前、事務員のひとりに赤紙がきて欠員が生じたための措置らしい。

佐喜枝にうってつけの仕事だと徳松は思った。佐喜枝は女学校を三年で中退したあと、東京淀橋区の下落合で、母親名儀の下宿屋梅香館をほとんどひとりで切り回していた。中退したのは心臓弁膜症のためと聞いたが、それにしてはよく立ち働いて、防空演習にも、あまり人付き合いをしたがらない母親に代って、つとめて出るようにしていた。防空演習といえば、一度だけだが、徳松も佐喜枝といっしょに面白半分、参加したことがある。もちろん事故に遭う前のことで、その日はたまたま警察署の非番の日だったのである。けれどもかれは、佐喜枝にこれ見よがしに付き纏って、かえってかの女の不興を買った。

算盤が得意かどうかはわからない。しかし廊下を通るとき、六畳の茶の間で、ラジオを聞く母親と卓袱台を挟んで、かの女がパチパチと弾いて帳簿付けをしている姿をガラスを嵌めた障子越しに何度も見ている。鉄山の事務所ではどうせ大した技量を望んでいるのではあるまい。むしろ問題は佐喜枝のほうだ。要造のはからいで佐喜枝たち家族は、黒葉の診療所の宿直室で寝起きしている。只も同然の部屋代で住まわせて貰う見返りに、佐喜枝が週に二度茅野町からやってくる老医師を手伝って、看護婦の真似事をしていると聞いているが、まずそれをどうするか。生れて間もない赤ん坊については、まだ五十にならない母親が付いているのだから、授乳の件さえ片付けば何とかなるだろう。一番の難関は、かつて憎みに憎み、いまだって完全に赦していないであろうこのおれと、おなじ鉱山会社に勤めることでふたたび関わり合うことを良しとするかどうかということだ。ところが、こっちはまさに関わり合いたくて近づこうとしているのである。おれも相当に執念深い男だな、と徳松は思わず苦笑した。

とにかくこうなったら根気よく説得するしかない。女を攻めるには押しの一手に限る。惚れら

れて厭な気がする女がいるだろうか。まして相手の亭主は、戦地からいつ帰ってくるかわからない身である。帰ってくるにしても骨になって還ってくるという場合もある。むしろその公算が大きい。それについては、佐喜枝も不安を感じているようで、そこがこっちの付け目なのだ。

音幌によこした便りのなかで、男の児の誕生を知らせる文面につづけて、佐喜枝は去る七月七日のサイパン島の玉砕と、それから間もないテニアン島の全滅の報に触れて、こう書きつづっていた。

《川添は松本の第五十聯隊付軍医として七月初めに師団司令部のあるグアム島に赴任したのですが、実はすでにそのとき聯隊はサイパンと隣合つたテニアン島の守備にあたつてゐたといふ噂があるのです。噂が本当だとしたら、川添もテニアンに渡つて戦死したのではないでせうか。それを思ふと夜も寝られず……》

信州の身体壮健な成年男子は、大抵が松本の聯隊に入営するきまりになっている。どこからか噂が洩れてくるのは当然として、浅草に生れ埼玉県の飯能で育ったかつての下宿人仲間、川添耿一が選りによって松本の聯隊に回されたことにかれは運命の不思議をおぼえずにはいられなかった。左の目を事故で失わなかったら、自分こそその聯隊に所属する一兵卒としてテニアンの土に埋もれているかもしれないのだから。おれと川添は一種の悪縁で結ばれている、とつぶやいて徳松は歓喜に似た戦慄に襲われた。

悪縁で結ばれているといっても、優位に立っているのはいつも川添のほうだった。徳松が川添と知り合ったとき、川添はすでに私立医大を出て付属病院内科医局に勤めていた。徳松よりひとつ齢が上だから二十四、ほやほやの青年医師である。いかつい躰付きの徳松にくらべると華奢な

印象だが、銭湯に行って裸になると、大学の予科の頃から陸上競技部で短距離をやっていたというだけあって、筋肉質の引きしまった躰をしていた。医学生にたいする特別な配慮からだろうか、兵隊検査はそれでも乙種合格だという。まっすぐ鼻筋の通った気品のある顔立ちで、これでは梅香館の母娘が特別扱いするのも無理はないと思われた。

川添は徳松が淀橋の戸塚警察署の巡査であることに興味をおぼえたらしく、知り合って間もないある日、いきなり訊かれた。医学の専門書と机の脇に立てかけたギターが目を惹く川添の部屋でのことである。

「木倉さん、あんたは信州で工業学校を途中まで行ってるんでしょう？　いくら肋膜を患ったからといって、勿体ないなア。どうして警察官なんかになったの」

警察官なんかにという言い方に厭な響きはなかった。もっとも、仮りにあったとしても、自分たちを眺める世間の目にはとうに慣れっこになっていたから、いまさらどうということはなかった。やつらは表面は畏怖しながら腹の底では軽蔑しているのだ。

その点、川添はちがうようだ、と徳松は思った。見るからにお人好しらしいこの青年医師は、技術者たらんとした当初の志とまったく異なる道を選んだおれの生き方に、素朴な疑問を抱いているにすぎない。

徳松はこれまで、人に訊かれると、勉強は性に合わないので早く職につきたかった、それには巡査になるのが一番と答えてきたが、本当はそうではなかった。当時まだ存命中の父親が、怪しげな融資をうける知人のために連帯保証人の判を捺し、それが案じた通りの結果をまねいて学資も儘にならない苦境に立たされたことが主な理由であった。が、そのほかにもうひとつ、木倉旅館に毎年のように家族をつれて避暑にきていた志摩警部の感化が大いに与っていたのである。志

摩は警視庁警務部に所属する剛腹の人物だった。
ひとつこの気のいいお坊っちゃんをけむに巻いてやるか。徳松は下手な洒落そのままに、金鶏を口にくわえて、
「なぜ巡査になったかといいますとね、理由はひとつ、あのサーベルに憧れたからですよ。ちょうど川添さんが聴診器に憧れたように」
そういってマッチを擦った。
「なるほど。ぼくがヒューマニズムを信奉しているごとく、あんたは権力に惹かれたというわけだ」
「そういうことになりますか。自分には難しいことはさっぱりだけど、国家ちゅうものを楯にしていると生き易いことは確かですね。その代り、給料はお話にならないぐらい安い。はっはっはっ」
だが川添は乗って来なかった。それどころか、ふっと眉をひそめると、
「なんだか居直っているみたいだな。しかし木倉さんのいう通りでしょう。早い話、ぼくがどんな立派なことをいったって、いずれ戦地へ持って行かれるのは避けられないんだもの。しかも軍医というのは最前線で働くよう運命づけられている。まあ生きて帰れる確率は低いね」
「いまが執行猶予の身であることに、お互い変わりはありませんよ。自分はせいぜいいまのうちに虎の威を借りる狐――いや狗か、狗に徹して愉しくやるつもりです。といっても交番勤務ぐらいじゃ、大したことはできないんですがね。ねえ先輩、人に怖れられるって、なんともいえない快感があるんですよ」
川添は目の前に漂う煙草のけむりを手ではらって、

「偽悪趣味もほどほどにしてほしいな。どうもあんたのいうことは癇にさわって仕方がない」
といった。出ていってほしいという気持が露骨に顔にあらわれていた。徳松は煙草を消すと、
「いやア、怒らせてしまったかな。だったら謝りますよ。悪気はないつもりなんですが、自分はいつもこうして人に嫌われるんです。その点、川添さんは人望があって羨ましい。ここの娘さん、佐喜枝さんといいましたか、あの人なんか洟もひっかけてくれやしません。あの人のちょっと皮肉っぽい感じの片笑窪、なかなか魅力がありますねえ」
そういって川添の顔を盗み見た。川添はそっぽを向いた。あのふたり、どこまで行ってるのだろう。戸襖をあけて廊下に出ると、徳松はわれ知らず、畜生！　とつぶやいた。
それからほぼ一年後の昭和十八年の夏、町なかの剣道場で子供たちに早朝稽古をつけていた折に、事故が発生した。
模範試合ということで三段の腕前を持つ都電運転手のYと手合わせをしていたときのことだ。Yが一歩踏み込んで突きに出てきた瞬間、普通では考えられないことが起こった。相手の竹刀の先皮が切れて撥ね飛び、ひろがった竹の一本が顔を掩った防具の隙間から左の目を突き刺したのである。わあッと叫んだかどうか記憶にない。激痛にたちまち意識が薄れ、深い昏冥のなかに墜ちた……。竹刀や防具は事前に点検するのが常識である。しかし仔細に点検すれば、どれをとってもどこかしら欠陥があった。といって物資不足の折、新品に取り替えるのはおろか、修理に出すのも儘にならない。町道場では尚更のこと。Yが手にした竹刀の先皮は、擦り切れて寿命がきていた。それでもYは点検を怠ったという理由で警察でさんざんしぼられ、道場主の酒屋の主人は管理不行届の科で一ヵ月の道場閉鎖を言い渡された。
勤務明けの出来事とはいえ、警察官たる者が町なかの道場で一般市民を相手にして事故に見舞

われる。事故というと聞えはいいが、要するにこれは精神のゆるみからくる完全な敗北である、というのが署内の見方だった。顔の斜め半分を頭にかけて繃帯でぐるぐる巻きにされて、木倉徳松は警察病院のベッドに横たわっていた。噴き出る汗が寝巻をしとどに濡らす。

二度目に見舞いに訪れた直接の上司である佐野警部補は、扇子を気忙しく使いながら、

「まあ目だけで済んでよかった。これがまかり間違って脳にまで及んでいたら、えらいこっちゃ。先生の話では義眼を入れるそうだが、そのほうがかえって男前が上がるかもしれんぞ」

そういうと、扇子をあおぐ手を止めて、

「さて、そこでだね、あんたの当面の処置についてなんだが、署内でいろいろ揉めてな、けっきょく依願退職のかたちを取って貰うことになった。これだと退職金が出せるんだよ、スズメの涙ほどのものだけどな。でなくとも、片目を失くしたんじゃ巡査は務まらん。ま、運がなかったとあきらめるんだね。その代り、大きな声じゃいえんが、軍隊に取られる心配はなくなったわけだ」

じゃお大事に、将来の身の振り方についてはいずれ署長と相談して考えることにしよう、と言い置いて上司は帰って行った。将来だって？　こんなになって、いったいどんな将来があるっていうんだ。警察官の身分を剝ぎ奪られたら、ただの哀れな不具者でしかないではないか。徳松は鉄砲玉に当たって死ねない身の不運を呪った。

かれが佐喜枝を介して事故の顚末を兄に報せたのは、繃帯が取れて、怪我をした目を眼帯で掩うようになってからである。弟のサーベル姿が得意でならない純朴な兄。その兄の嘆きを思うと、会うのが鬱陶しかった。それで一日延ばしにのばしていたのだ。

信州から出てきた要造は、なぜ早く報せないと不満顔だったが、すでに弟の将来に見切りをつ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo